

[掲載紙] 朝日新聞「上州経済風信」

[掲載日] 2013年2月21日

[テーマ] 「電源群馬」の再生可能エネルギー —自然資源の有効活用を—

当地・群馬の友人の案内で甘楽町にある織田氏ゆかりの楽山園を訪れた。江戸時代初期に造られた旧小幡藩の庭園で、国の名勝に指定された県内唯一の大名庭園だ。近くには、名水百選の一つ雄川堰があり、住民の生活用水や非常用水などに利用されてきた。



群馬は水資源に恵まれた土地柄であり、上毛かるたにも「坂東一の川」利根川や片品溪谷・吾妻峡などが詠まれている。県内では、明治以降、河川を利用して数多くの水力発電所が設置された。上毛かるたの「理想の電化に電源群馬」の絵札には、1968年に完成した利根川水系の下久保ダムが描かれている。

ただ、電力の主力が火力や原子力に移ったため、県内の水力発電量が伸び悩んだ。1969年には県内の電力消費量が発電量を上回り、その後、県外電力への依存が高まり、近年の電力自給率は20%台にとどまっている。

■群馬県内の電力需給状況

	県内発電量	県内消費量	電力自給率
1960年	27.5	12.1	228.0%
1969年	37.7	37.8	99.7%
1990年	46.4	122.2	38.0%
2010年	41.5	169.8	24.4%

※単位は億キロワット時

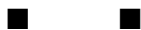
県内発電量は群馬県「統計年鑑」から（東京電力群馬支店、東京発電、群馬県企業局の合計）

県内消費量は東京電力の販売電力量



ところが、地球環境への配慮や電力不足への対応などから水力や風力、太陽光などの再生可能エネルギーが脚光を浴びるようになってきた。政府が昨年7月、再生可能エネルギーでつくられた電気を電力会社が固定価格で買い取る制度を始めたことから、企業や一般家庭でも太陽光発電設備が急速に普及している。県も1月に「電源群馬プロジェクト推進会議」を設置し、長い日照時間や豊かな水資源など県の特色を生かした再生可能エネルギーの導入に、全庁的に取り組もうとしている。

再生可能エネルギーは枯渇しない貴重な資源であるため、今後の技術開発やインフラ整備が期待される成長分野だ。普及のメリットは数多くあるが、付随するリスクやコストを十分検証することも必要だろう。



県内では、かつて水力発電の整備が進められる中で想定外の出来事が生じた。「電源群馬」の象徴である下久保ダム completion 後、三波石峡の川が堰き止められたため、三波石は黒ずみ、輝きをなくした。清流がよみがえるまで、ダム完成から30年強もの歳月を要したことは、今も地域の歴史に刻み込まれている。

楽山園を訪れた後、国の名勝で天然記念物に指定された三波石峡や積雪の桜山公園を散策し、「三波石とともに名高い冬桜」と上毛かるたに詠まれる景観を満喫した。桜山の山頂で強力な上州からっ風にあおられ、自然が生み出すエネルギーの強さと奥深さを思い知った。

日本銀行前橋支店長
相良 雅幸